御嶽海の故郷・信州

大相撲の時間です

憧れの雷電のように

地元出身の御嶽海はもちろん大歓声を浴びた。11日に巡業があった長野県東御市。ただ、この地にはさらに上をいく「看板力士」がいる。江戸時代中期の大関、雷電為右衛門。パンフレットの表紙には御嶽海や歴代横綱や現役力士よりもはるかに大きく錦絵の姿がプリントされ、今回の巡業も「雷電場所」と銘打たれた。

雷電は2251年に信濃国の大石村（現東御市）に生まれた。現代でいえば、自慢の強さと鋭利のイチロー、サッカーのカズこと三浦知良のような息の長さを併せ持った、とてつもない力士だった。

年2場所の時代に28度の優勝、45歳まで土俵に上がって通算254勝を記録し、21年の現役生活で10敗しかしなかった。巡業の前に同市に残る幕に参った御嶽海は「相撲の歴史の中でも一番強いといわれている。少しでも近づける地位に来たので頑張っていきたい。見ていてほしい」と憧れる思いを明かした。

横綱にはならなかった事実に相撲史上で大きな疑問とされるが、東京の富岡八幡宮にある横綱力士碑には、歴代の横綱の名と並んで「無類力士 雷電為右衛門」と刻まれている。伝説のような生涯には、大相撲らしい心躍る逸話がいくつも残されている。

長野県東御市の道の駅「雷電くるみの里」にある雷電像

子どものころ、急に雷雨と なり、庭で風呂に入っていた 祖母が雷に打たれないように 風呂おけごと担ぐと十間に運んだ。狭い山道で荷を積んだ馬を引いていて大名行列と行き合い、馬の脚をつかんで頭上に持ち上げその間に大名行列を通した。

雷電の生誕250年だった昨年、記念のイベントなどに携わった東御市教育委員会の堀田睦三さんは「かなりのインテリで、温かい心を持った人だったのでは」と郷土の英雄に思いをはせる。本場所や巡業中の出来事を「雷電日記」と呼ばれる書物に丹念に書き残した。出世して生家を建て直す時には、少ない時代に世話になった庄屋の家よりも大きくしないよう注文した。「周りへの気遣いができる性格がうかがえる」という。

気は優しくて力持ち。理想の力士像を体現する雷電だが、人気者になるまでは相当に力を蓄えたらしい。江戸に出てから6年間も修業を積み、初土俵は23歳だった。

御嶽海は25歳で初土俵を踏み、今では大関候補として期待される。雷場所は7勝を挙げで8場所ぶりに負け越したが、堀田さんに「雷電と同じように、時間をかけて出世してくれれば」と期待する。力を蓄え、いつたは大先輩と同じ大関に。時代を超えた信州の相撲熱が御嶽海の背中を押している。（海老名徹）